

なんでも相談室

雇用サービスセンターとは

人手不足が深刻化し、雇用問題がクローズアップされている昨今ですが、県ではさきほど雇用サービスセンターを開設されたと聞きましてこの雇用サービスセンターとはどんな仕事をするとしようか。

企業サービスコーナーから内職コーナーまで

このセンターは昨年五月に開設されましたが、企業サービスコーナー、人材コーナー、内職コーナーの三つのコーナーを設け次の業務を行なっています。

企業サービスコーナーでは従業員の募集から適性検査、定着、訓練、労働節約など雇用問題についての相談や指導援助を行なっています。コーナーに持ち込まれた相談は月十件程度で、相談の多かったのは労務管理で、中小企業における労務管理の困難性がうかがわれます。

た隔月ごとに雇用問題の講演会を開催していますが好評です。

人材コーナーでは、人材銀行のシステムをとり、総務、経理、営業、行政などの職経験者および機械、電気、土木、建築その他スペシャリストの職業について雇用相談や就職の相談に応じています。

現在までの求職申込者数五百五十人、求人数三百十人、就職決定者百四十人で、利用者もふえ、求人者、求職者の双方から歓迎されています。

内職コーナーは家庭外で働くことの困難な婦人などに対し、内職希望者の相談、登録、発注、内職の受理あつ旋を行なうとともに、苦情について双方のよき理解者としての立場から調整、解決に努力しています。

現在、県下の内職就業世帯は約三万四千世帯で内職就業者は約三万五千人、そのうちセンター登録者は千九百人、内職従事者九百五十人で気軽に利用されています。

なお詳しくは、雇用サービスセンターへ直接お問い合わせください。(県雇用サービスセンター)

本格的な梅雨期を迎える六月中ばごろだった。市職員の中から水防に備えて、自分たちの手で、土のうづくりをして万一に備えておこうではないかという話もちあがった。

大雨がやってきた。六月末から降りつづいた雨は、七月七日の、たなばたさまの日までもやまず、なお降りつづいた。かねては、水のない「水無川」は警戒水位(二・五メートル)を突破、流域の住民には、避難命令の事態まで引き越した。幸い、どうやら堤防の決壊は免かれた。用意していた土のうが大いに役立ったのは、いうまでもない。

★町から村から★

八代市 防災に役立った1600俵の土のう

この地区には、六百六十世帯、三千九百九十六人が住んでおり、県の指定を受け、いまは場整備事業がどんどん進められているところ。この孤立化を防いだのは、市執行部の機敏な判断と行動であったと、多くの市民から、感謝の意が寄せられている。

八代市秘書課 田川 正明

河浦町 出席率八〇%の町政座談会

河浦町が昭和三十三年から毎年実施している移動町政座談会は、十二年目を迎えたが、ことしも五月七日から十九日までの十日間、町内三十会場を実施された。この座談会は、町政の町民への徹底と世論の町政への反映をねらったものだが、とくに住民とひびきをまじえて、気軽に話しあおうと、住民が顔見知りばかりの部落を単位にして、午前九時から正午まで、午後二時から五時まで、夜八時から十一時までの一日三会場が開く。

町側から増田町長以下全課長が出席、まず町で製作した町政の現況を紹介する八ミリ映画が上映された後、町長から町政の基本方針と新年度の重点事業、各課長から予算の内容、各部門ごとの事業計画などが説明され、残り一時間三十分が町民との意見交換にあてられ、毎年町政への重点周知事項を取上げ、これを話題の軸にしているのも特色の一つ。

ことしの出席者は、昨年より六十人多い千五百四十一人が出席。全世帯の約八割近くが出席したことになるが、なか

は親子あるいは夫婦で出席する家庭も多く、出席者の顔ぶれが毎年若返って行くが目立ち、また発言も特定の人でなく、出席者の全部が話し合いに加わる雰囲気生まれたことなど、関係者を喜ばせている。

この座談会で河浦町が最も重要視していることは、寄せられた意見は絶対に聞き捨てにしないということ、いつ、どのような方法で実施する、関係省庁に折衝する。実施出来ないなど、明確にし、会場で即答出来なかったものについては課長会などで検討、現地調査のうえ、文書あるいは係員が家庭を訪問して回答していることである。

この町政懇談会を通じて実を結んだ事業の主なものとしては、昨年から取り組んでいるチビッコ広場の整備二カ所、基地道路整備三カ所のほか、街灯設置十五カ所、交通安全施設三カ所など身近なものも多く、今後検討する大きな課題としては、小、中学生の遠距離通学者の通学費助成などがある。

山鹿市 市街地再開発 胎動はじまる

城北横断道路の開発と密接な関連性をもち市街地(広町)再開発問題は、山鹿

市がその繁栄の基盤を定める百年の大計であるだけに、慎重かつ積極的に昭和四十二年度から研究を積み重ねてきたが、ようやく県北のショッピングセンターにふさわしい町づくりの構想がまとまった。

山鹿市をめぐる道路交通の新しい展開は、すでに始まっており、九州縦貫自動車道は、植木インターチェンジ予定地での起工式が行なわれ、山鹿市を通過する動脈国道三号線と約十分の距離で交わり、その北部に位置する玉名インターとは、山鹿―玉名線(現道)二十分の距離で、その三角形の頂点に山鹿市があることになる。

一方阿蘇から長洲を経て、長崎へつなぐ城北開発横断道路は、城北新時代の夢を荷って、いよいよ実現も間近になり、菊池―山鹿間、長洲―玉名間は一部を残してほとんど完成、山鹿―玉名間は急ピッチで整備が進んでおり昭和四十七、四十八年度には両者とも完工して全線開通の運びになる予定。しかし、残された一部市街地こそ、全長六十五キロのほぼ真中に当る、山鹿の中心街なので、いわば城北横断道路の画竜点睛―これがこの二百三メートルの広町商店街ということ



―再開発が待たれる 広町商店街―

になる。

商店街側でもこの重大さをよく認識して、関連商店街を含める商店街振興組合(参加組合員約九十人)を七月一日に設立。商店街の共同化をはかり、ことし中に中小企業振興事業団の診断を受けて近代化への体質改善にいよいよ着手する方針をたてた。

(山鹿市文書広報課 甫足正喜)